

中国人日本語教師の キャリア形成についての一考察

— 複線径路・等至性モデルによる分析から —

呉 慧・石 澤瑋

要 旨

本研究は、中国人日本語教師のキャリア形成のプロセスを考察するものである。中国の大学で働いている中国人日本語教師1名を対象とし、日本語教師として学び続けるというキャリア選択に至った人生径路を複線径路・等至性モデルにより質的に分析した。そこで、中国人日本語教師を取り巻く社会の動きが変化している中で、中国人日本語教師がどのように日本語教師としての立ち位置を見直し、「獲得」と「喪失」を経験し続けている中でどのように成長していくのか、といったプロセスを可視化することができた。一方で、中国人日本語教師のキャリア形成の多様性、および海外の日本語教師のキャリア形成の支援のあり方を検討することが今後の課題として残されている。

キーワード

中国人日本語教師 キャリア形成 複線径路・等至性モデル (TEM) 環境的要因

1. はじめに

世界的な教師教育の改革の中で、「生涯学習者としての教師」という新しい教師像が生まれてきている。このような状況に置かれている教師は専門家として生涯学び続けることが求められている(秋田 2017)。では、非日本語使用環境における海外の日本語教師は、日本語教育の専門家として生涯学び続けることをどのように意味づけているのだろうか。国際交流基金2021年度調査¹によると、海外における日本語教育機関数、日本語教師数、日本語学習者数はいずれも中国が1位となっている。しかし、学習者の教育段階別の詳細を見てみると、中等教育学習者数が大幅に増加しているが、高等教育学習者数は減少傾向が続いていることがわかる。高等教育での日本語学習者数が減少し続けている中で、中国の大学で働いている日本語教師²が危機的な状況に陥ったといえる。では、中国人日本語教師はどのように自分のキャリアと向き合い、どのように社会的・環境的要因の影響に応

じて成長していくのだろうか。そもそも、非日本語使用環境における中国人日本語教師のキャリア形成とはどのようなものだろうか。そして、中国人日本語教師のキャリア形成の実態を検討することで、国籍・母語によらず、多様な背景を持っている日本語教師にどのような視点を提示できるのだろうか。本研究では、中国人日本語教師のキャリア形成のプロセスに着目し、海外の日本語教師にとって、ことばを教えることにはどのような意味があるのかを論じてみたい。

2. 先行研究

まずは本研究における「キャリア」と「教師のキャリア形成」の捉え方を述べる。「キャリアをどう捉えるかによって、日本語教育においてもその支援のあり方が変わってくる」(館岡 2023a p.2)。本研究は、「キャリア」を狭義の「ワークキャリア」という職業そのものだけではなく、広義の「ライフキャリア」という生き方も視野に入れた上で、教師が社会的・環境的要因とのかかわりの中で、教師としての働き方や生き方を創っていく過程を「教師のキャリア形成」と捉えている。次に、日本語教師のキャリア形成に関する先行研究として、館岡 (2023b) はあらためて日本語教師をキャリアとして捉え直し、日本語教師各自のキャリア自律の重要性とキャリアの観点から日本語教師について考える場の必要性を主張している。そして、藤原・竹内・館岡 (2023) は日本語教師の専門性とキャリア支援を考えるワークショップを実施し、他者とともに自身の日本語教育観を語り合うことで、自分らしいキャリアと生き方を考える場が必要であると述べている。このように、日本語教師のキャリア形成についての研究は少しずつ進められてきている。

とりわけ、近年、複線径路・等至性モデル (Trajectory Equifinality Model: 以下、TEM) を用いて分析する研究も多く見られる。TEMとは、「人間の発達や人生径路の多様性・複線性の時間的変容を捉える分析・思考の枠組みのモデル」であり、「時間が持続するなかでの対象や現象の変容プロセスを捉えるのである」(荒川・安田・サトウ 2012)。TEMの「歴史的・文化的・社会的文脈と時間のなかで描き出すこと」(安田・滑田・福田・サトウ 2015 p.31) の目指すところから、キャリア形成のプロセスとそれに影響を及ぼす社会的・環境的要因を考察するには適しているといえる。TEMにより、日本語教師のキャリア形成を分析する先行研究として、布施 (2019) は、転職して日本語教師となった初任日本語教師を対象とし、TEM図で径路選択の支えや妨げの環境的要因がキャリア形成に大きく影響していると指摘している。佐藤・片野・高木 (2022) は、28年の日本語教師歴の日本語教師1名を対象とし、TEMを用いてキャリア形成に影響を及ぼす「外的要因」と「内的要因」を示している。また、若杉 (2019) は日本語教師の大学院進学というキャリアパスをTEMで分析し、「日本語教師のキャリア形成には自己の教師観や成長観の意識化や、批判的に振り返る機会、キャリアについて相談できる環境が重要である」(p.27) と述べている。そして、高井 (2019) は日本語教師を辞め別の仕事に就いている人を対象とし、孤立した環境で日本語を教えている人への支援が重要であると示している。

これらのことから、TEMを用いることは日本語教師のキャリア形成の考察するに適していることが示されていると同時に、日本語教師は環境的要因に影響され、それぞれたど

り着いた人生径路も多様であることがわかった。しかし、これらの研究はいずれも日本国内の日本語教師が対象であり、海外の非母語話者教師のキャリア形成の実態は未だ詳しくはわかっていないといえる。高橋（2015）は「国籍・母語によって語学教師の役割を決めるのではなく、一個人としての特徴をもった教師の多様性を認めること」（p.111）が重要であると指摘している。海外の日本語教師のキャリア形成に注目することで、国籍・母語によらず、多様な背景を持っている日本語教師のキャリア観を理解できる。その上で、日本語教師のさらなる可能性を議論する必要があると考えられる。

これらを踏まえ、本研究では、TEMにより、未だに研究が不足している中国人日本語教師のキャリア形成のプロセスを考察し、中国人日本語教師はどのように日本語教師になり、どのようにキャリアを選択し、または自身のキャリア形成をどのように意味づけるのかを探究していきたい。

3. 研究目的

本研究の目的は、中国の大学で働いている中国人日本語教師のキャリア形成のプロセスを明らかにすることである。具体的には、中国人日本語教師がどのように社会的・環境的要因の影響を応じて自らのキャリアを創ってきたのか、そして、非日本語使用環境で日本語を教えることをどのように認識するのか、日本語教育の専門家として学び続けることをどのように意味づけるのか、という3つの観点から考察を行う。日本語教師になろうと考えている筆者が1人の中国人日本語教師と語り合い、TEMを用いて中国人日本語教師のキャリア形成の可視化を試みる。

4. 研究方法

4.1 調査協力者

本研究を実施するあたり、日本語教師歴7年の中国人日本語教師1名にインタビューを行った。「何人を対象にして話を聴くか」について、荒川ら（2012 p.98）の「1・4・9の法則」の経験則によると、インタビュー対象者が1人の場合は「個人の経験の深みをさぐることができる」、インタビュー対象者が4±1人の場合は「経験の多様性を描くことができる」、インタビュー対象者が9±2人の場合は「径路の類型を把握することができる」という。その一方、質的研究において、事例数が多くなるほど個人の意味づけは抽象化され、ほかの事例との混乱を招く可能性がある（荒川 2015）。そのため、本研究では、中国人日本語教師の環境への働きかけを深掘りすることを目的とすることから、1名の協力者（以下、A先生）に依頼することに至った。A先生は30代の男性で、中国の大学で働いている日本語講師³である。A先生は学部時代から修士課程まで6年間の日本語学習者経験を積んだ。修士課程を修了した後、中国のある公立大学⁴の日本語講師として勤務して現在に至っている。また、A先生の出来事を理解するために、A先生が働いている大学の学部長1名、A先生の同僚4名にも依頼し、それぞれにインタビューを行った。

4.2 インタビューの手続き

調査に際しては、事前に個人情報の保護およびデータの取り扱いに関する説明を行い、研究目的のみでのインタビューデータの使用に対して承認を得た上で、インタビューを開始した。2023年2月～4月の間に、A先生に半構造化インタビューを3回、A先生の学部長に半構造化インタビューを1回、同僚4名にグループ・インタビューを1回行った。インタビューの時間はそれぞれ1時間～2時間であり、同意を得た上で録音した。まず、A先生への3回にわたる半構造化インタビューでは、異なる内容について質問している。1回目は日本語学習者としての経験から日本語教師になったきっかけ、または日本語教師として就職後の人生径路を、調査協力者自身がどのように意味づけるのかを中心に聞いた。2回目は分岐点となった出来事、調査協力者自身に関わる社会的・環境的要因について聞いた。3回目は筆者が作成したTEM図を見ながら確認を行うとともに、聞き逃したことを確認した。次に、A先生の語りから、A先生の学部長と同僚がキーパーソンとしてあげられたため、A先生の学部長と同僚へのインタビューでは、A先生とのかかわり、またはA先生への印象について聞いた。

4.3 TEM図の作成

本研究では、TEM図の作成の手順は次の通りである。①A先生へのインタビューのデータを文字化した。②意味のまとまりごとに切片化した。③時系列に沿って配列し、切片化された語りにラベルを付して抽象度を上げた。④出来事のプロセスにおいて「EFP (Equifinality Point : 等至点)」「P-EFP (Poralized EFP : 両極化した等至点)」「BFP (Bifurcation Point : 分岐点)」「OPP (Obligatory Passage Point : 必須通過点)」「SD (Social Direction : 社会的方向付け)」「SG (Social Guidance : 社会的助勢)」をそれぞれに設定した。⑤TEM図を作成する際に、それぞれのポイントが調査協力者にどのように影響しているのかを検討するとともに、全体を見返した。

5. 研究結果

5.1 時期区分

ここでは、等至点、分岐点、必須通過点を本研究の研究目的にしたがって抽出し、それらを一覧に示したもの(表1)、およびTEMにより図化したもの(図1)を提示する。以下の通り、表1はTEMの用語および本研究における意味を示し、図1はA先生の日本語教師としてのキャリア形成のプロセスを示している。

5.2 各時期におけるプロセス

5.2.1 準備期

まずは、A先生のキャリア形成の準備期について述べていく。A先生は日本語専攻の学習者として、中国の大学で日本語を4年間学んでいた。大学時代で、A先生は〈憧れの先生の存在〉⁵に気づき、日本語教師になりたいという気持ちが生まれてきた。しかし、大学卒で〈日本語専攻就職の困難〉があるため、A先生は〈大学卒で就職〉するのではなく、

表1 TEMの用語および本研究における意味

用語	本研究における意味
等至点： EFP (Equifinality Point)	EFP1：日本語教師として働き続ける EFP2：日本語教師として学び続ける
両極化した等至点： P-EFP (Poralized EFP)	P-EFP1：日本語教師をやめる P-EFP2：これまで通り働く
分岐点： BFP (Bifurcation Point)	BFP1：大学卒で就職 BFP2：日本語に関係ない仕事 BFP3：管理職への転職 BFP4：今のキャリアのまま BFP5：博士課程に進学できず
必須通過点： OPP (Obrigatory Passage Point)	OPP1：大学院修士課程に進学 OPP2：大学で日本語教師として働く OPP3：管理職への転職を拒否 OPP4：訪問学者として研究に従事 OPP5：大学院博士課程に進学
社会的方向付け： SD (Social Direction)	SD1：日本語専攻就職の困難 SD2：教育と研究の両立の困難 SD3：日本語学科の不景気 SD4：社会的プレッシャー SD5：一人で北京に上京 SD6：働きながら進学
社会的助勢： SG (Social Guidance)	SG1：憧れの先生が存在 SG2：当時修士卒で大学の日本語講師になれる SG3：同僚との協働的な関係が築いている SG4：学生との協働的な関係が築いている SG5：支えてくれる上司 SG6：学校の支援制度

〈大学院修士課程に進学〉することになった。その後、A先生が2年間修士課程で学び、修士課程を修了した時、中国国内の日本語教育専門家はそれほど多くはないため、博士学位が取れなくても、〈当時は修士卒で大学の日本語講師になれる〉のである。このように、〈日本語に関係ない仕事〉をする気がなかったA先生は、日本語教師になろうとする決心に支えられ、中国の〈大学で日本語教師として働く〉ことになった。A先生は自身の日本語学習者の経験から、日本語を使って何らかの仕事をするのではなく、日本語を教えることをキャリアの始まりとして日本語教師への道を歩み始めた。

5.2.2 日本語教師としての確立期

次に、A先生の日本語教師としての確立期について述べていく。大学の日本語教師を始めたA先生は、教育、研究と管理運営の3つの役割を担った。A先生は研究実績を持つことの必要性を理解し、「研究実績により、社会的評価がもらえる。そして、日本語教師として食べていけるかどうかにもそれに決められている。」⁶とA先生は語った。一方で、A先生は「学生に信頼されることこそが教師の目指すべきところだ」という信念を貫き通し、〈教育と研究の両立の困難〉を感じる一方で、研究成果を教育に還元すべきであると信じている。このような日本語教育への情熱を持っているA先生は、〈学生との協働的な関係

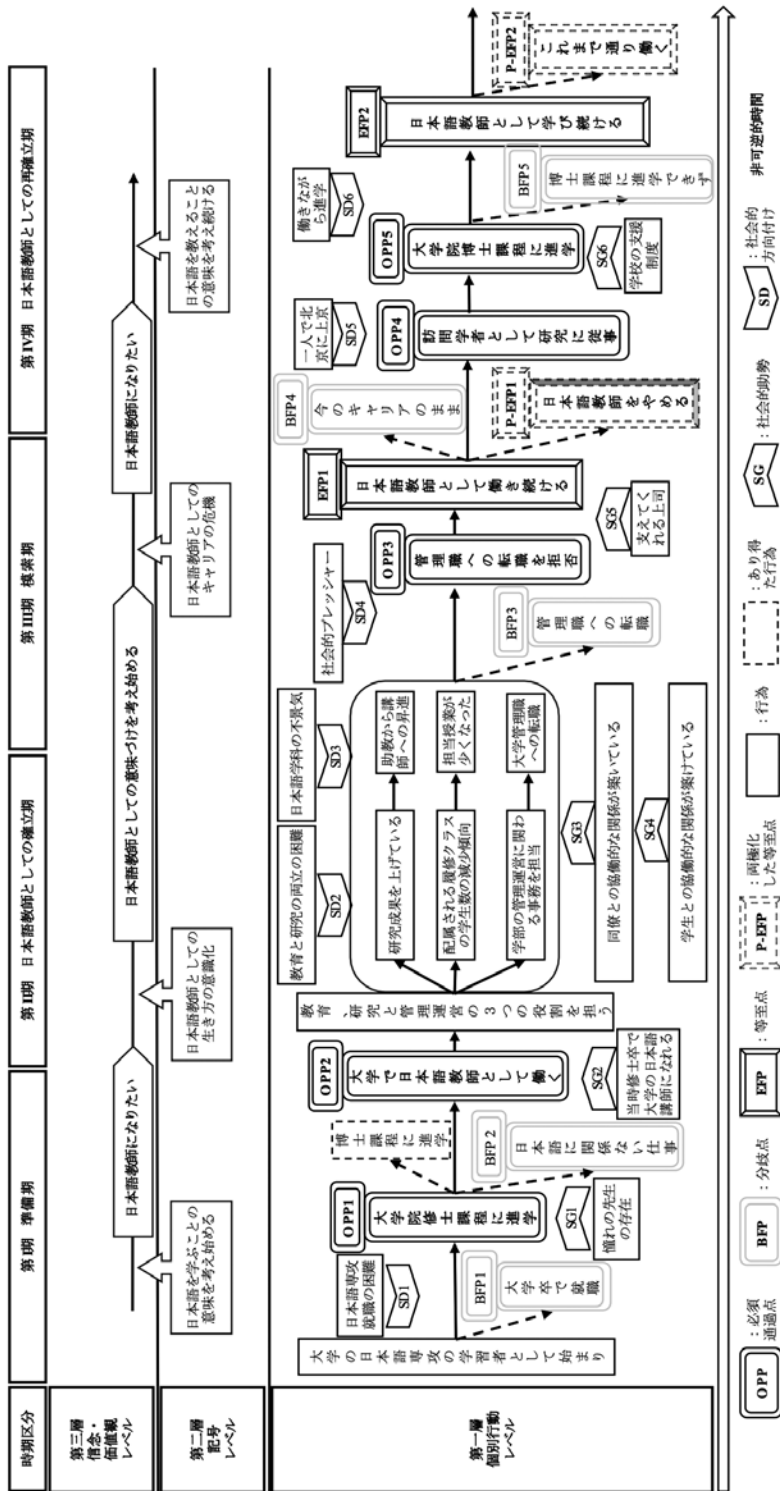


図1 中国人日本語教師Aさんのキャリア形成のTEM図

が築いている〉とともに、〈同僚との協働的な関係が築いている〉ため、日本語教師としての仕事の魅力を実感しており、日本語教師としてのキャリアアップを期待していた。それと同時に、A先生は人事部の管理職の仕事をも果たしていた。日本語教師に関する仕事以外に、人事部の管理職の仕事を担当する理由として、A先生は「私は現状に甘んじることなく、常に自分成長するために意識しているから、管理職の仕事は何があるのかわからないが、予期せぬ成長につながるかもしれない」と語った。このように、A先生は日本語教師として、日本語授業を進める上で、日本語教育に関する研究を深めようとし、人事部の管理職の仕事も引き受けた。しかし、その後、〈日本語学科の不景気〉により、A先生に配属された履修クラスの学生数は減少傾向にあった。その結果、A先生の担当授業が少なくなり、A先生は日本語を教える場を失うというキャリアの危機に陥った。

5.2.3 模索期

さらに、A先生のキャリア形成の模索期について述べていく。担当授業が少なくなったため、A先生は将来を見据えたキャリアイメージを抱く必要があると意識した。〈日本語教師として働き続ける〉のか、それとも〈日本語教師をやめる〉のか、A先生はキャリアを左右する重要な決断を迫られた。この葛藤が促進的サインとなり、A先生は日本語教師としての意味づけを考え始めた。当時、日本語教師をやめ、〈管理職への転職〉も可能であったが、「職位が上がれば満足できる、決してそういうわけではない。私の心の中には、より高次の自分が、鳥が空から地上を俯瞰して見るように、これからはどこに行くべきなのかを、判断しているのだ」ということから、A先生の心の中にある「より高次の自分」が、職位によらず、誰かのためになる仕事、つまり、自身の成長が社会に貢献できる仕事に携わることを求めていた。その「誰かのために」という問いに対し、A先生は「日本語学習者」という答えを出した。言い換えると、A先生は日本語教師へのこだわりがあるから日本語教師になりたいというわけではなく、日本語教師として日本語学習者の成長に貢献することが自身の成長につながるという期待を抱いていた。そのため、A先生は〈日本語教師として働き続ける〉と決めた。A先生は〈管理職への転職を拒否〉し、〈社会的プレッシャー〉を感じたが、〈支えてくれる上司〉の存在が後押しとなった。A先生の上司は「Aさんは絶えず自己成長を追い求める人間なのだ。教師のキャリア形成はほかの職と違い、自分を更新し続けないといけないから、それを支える環境をつくるのが当然だ」と語った。このように、A先生は上司に支えられ、キャリアの危機を転機に、日本語教師としての意味づけを考えた結果、自身の成長実感を得られるために日本語教師をやり続けると決めた。

5.2.1 日本語教師としての再確立期

最後に、A先生の日本語教師としての再確立期について述べていく。A先生は日本語教師としての長期的キャリアを見据え、〈今のキャリアのまま〉では、日本語教師としての専門性が不足していると考えたため、博士課程に進学しようと決意した。その後、A先生は〈学校の支援制度〉に支えられ、1年間〈訪問学者として研究に従事〉した後、〈大学院博士課程に進学〉することができた。A先生は自身のキャリア危機を乗り越えるために、〈日本語教師として学び続ける〉ことが必要であり、〈これまで通り働く〉ことは限界があるという認識に至った。博士課程に進学した後、A先生は〈働きながら進学〉し、〈一人で北京に上京〉することにはプレッシャーを感じたが、その分やる気も高まった。具体的

には、A先生は大学院の授業だけではなく、日本語教育に関する勉強会や研究会も積極的に参加し、研究実績を積み上げていくことに専念した。一方、A先生は北京の大学で行われた日本語授業を見学することで、「自分が働いている大学から出て初めて、世の中にはいろんな学生がいると気づいた。自分の経験や思い込みだけで学生を判断するのではなく、一人ひとりの学生の行動を丁寧に見ることが必要だ」と考えるようになった。このように、A先生は日本語教育に関する研究に取り組みながら、環境とのかかわりの中で、自身の日本語教育観を見直すことができた。

6. 考察

筆者がA先生と知り合った時は、まさにA先生が日本語教師としての再確立期を迎えているのである。それをきっかけとして、「今、ここ」を通して1人の中国人日本語教師と語り合うことによって、1人の中国人日本語教師のこれまでのキャリアはどのように創られてきたのかを描けるようになった。紅林(1999)は、「教師は経験を重ねることによって成長していく、その意味で常に未完成な存在なのである」(p.31)と述べている。これから中国人日本語教師はどのようにキャリアを創っていくのか、筆者自身の日本語教師になろうとしている気持ちを含め、不安を抱えながらも期待している。

キャリアを創っていくことは、社会的・環境的要因とのかかわりの中で、一個人としての生き方を創っていくことでもある。Huberman(1989)は教師の生涯にわたる普遍的なキャリア段階が想定されるが、そのキャリア段階は一直線的ではないと述べている。そのプロセスは一直線的ではないからこそ、今までの生き方を見つめ直す機会にもなるだろう。このように、日本語教師として働き続ける、日本語教師として学び続けるというキャリア選択に至った中国人日本語教師は、日本語教師というキャリアを通して自分らしい生き方をも選択したといえる。Baltes(1987)の生涯発達論によると、成長は常に獲得と喪失がともに起こっている過程によって成り立つ。中国人日本語教師のキャリア形成からもわかるように、キャリア危機に直面することが、ことばを教えることの意味づけを考えていく上での重要な契機になり、日本語教師としての専門性を高めていくことにもつながっている。そのため、中国人日本語教師は非日本語使用環境で、日本語を教えることで生計を立てていくと同時に、海外でことばを教えることの意義を見出し、日本語教師としての立ち位置を明確化する必要がある。つまり、キャリアを継続的に発達させていくには、日本語教師としての立ち位置を絶えず見直す姿勢が欠かせないといえるのではないだろうか。

本研究では、中国の大学で働いている中国人日本語教師がたどった人生径路を考察した。TEMにより、日本語学習者としての経験から日本語教師としてのキャリア形成を可視化し、非日本語使用環境で中国人日本語教師が自分の立ち位置を見直しながら、日本語教師としての意味づけを考えた上で、日本語教師として学び続けると決めたプロセスを明らかにした。しかしながら、自分の立ち位置を見直すことで日本語教師をやめるという選択に至る事例も考えられる。今後は、中国人日本語教師がたどった人生径路の多様性を描くこと、および海外の日本語教師のキャリア形成の支援のあり方に関する研究を引き続き進めていきたい。

謝辞

本研究は早稲田大学日本語教育学会2023年度大会での発表内容に加筆修正を加えたものである。貴重なご意見をくださった館岡洋子先生、会場内外でコメントをくださった皆様に御礼申し上げる。また、北京師範大学の指導教員である冷麗敏先生に心より感謝申し上げます。そして、調査に協力してくださったA先生、およびA先生の学部長や同僚たちにお礼を申し上げます。

注

- 1 国際交流基金2021年度調査（2023年11月30日閲覧）：
<https://www.jpf.go.jp/j/project/japanese/survey/result/dl/survey2021/all.pdf>
- 2 本研究の「中国人日本語教師」は、中国の大学で働いている中国人日本語教師のことを指す。
- 3 A先生は修士号取得者として2年間の助教を就いた後、一定の業績や研究実績を持った以上、講師に昇進した。
- 4 中国大陸の南に位置する工学を中心とした公立大学である。当校は日本語専攻を設置していないが、第二外国語としての日本語授業が行われている。
- 5 〈 〉内は本研究におけるTEM用語の意味を示している。
- 6 「 」内は本研究における調査協力者の生の語りを示している。

参考文献

- 秋田喜代美（2017）「授業づくりにおける教師の学び」佐藤学・秋田喜代美・志水宏吉・小玉重夫・北村友人（編）『学びとカリキュラム』岩波書店、pp.71-104
- 荒川歩（2015）「研究実践との往復から」安田裕子・滑田明暢・福田茉莉・サトウタツヤ（編）『TEM実践編 複線径路等至性アプローチを活用する』新曜社、pp.165-208
- 荒川歩・安田裕子・サトウタツヤ（2012）「複線径路・等至性モデルのTEM図の描き方の一例」『立命館人間科学研究』25、pp.95-107
- 紅林伸幸（1999）「教師のライフサイクルにおける危機—中堅教師の憂鬱」油布佐和子（編）『教師の現在・教職の未来』教育出版、pp.32-51
- 佐藤綾・片野洋平・高木裕子（2022）「日本語教師のキャリア形成とその形成過程に影響する要因の分析」『国際教育交流研究』6、pp.13-28
- 高井かおり（2019）「日本語教師の葛藤とキャリア形成—元日本語教師のライフストーリーから」『明星大学研究紀要』55、pp.1-16
- 高橋雅子（2015）「国内の日本語教育における非母語話者教師に関する考察—多文化共生社会における語学教師の多様性を問う」『日本語教育実践研究』2、pp.104-113
- 館岡洋子（2023a）「緒言：日本語教育におけるキャリア形成支援を考える」『早稲田日本語教育学』34、pp.1-4
- 館岡洋子（2023b）「キャリアとしての日本語教師—多様な働き方におけるキャリア自律の必要性」『早稲田日本語教育学』34、pp.59-70
- 藤原恵美・竹内雪乃・館岡洋子（2023）「日本語教師の専門性とキャリアについて考えるワークショップ」の実践—「ウチの見直し」と「ソトへの拡張」『早稲田日本語教育学』34、pp.71-83
- 布施悠子（2019）「初任日本語教師キャリア形成過程の可視化の試み—複線径路・等至性アプローチを用いて」『日本語教育』173、pp.46-60
- 安田裕子・滑田明暢・福田茉莉・サトウタツヤ編（2015）『TEA理論編 複線径路等至性アプローチの基礎を学ぶ』新曜社

- 若杉美穂 (2019) 「日本語教師のキャリア形成における大学院進学の意味づけ」『日本語日本文学論叢』14、pp.15-28
- Baltes,P.B (1987) *Theoretical propostions of life-span developmental psychology: On the dynamics between growth and decline*. *Developmental Psychology*, 23, pp. 611-626
- Huberman, M. (1989) *The professional life cycle of teachers*. *Teachers College Record*, 91 (1), pp. 37-51

(ご けい 北京師範大学外国語文学学院・博士課程)
(せき たくい 北京師範大学外国語文学学院・博士課程)